

田代よいとこーその2ー 地名の由来

本校の学区には色々面白い地名があります。今回はそのうちの田代と海底について紹介します。

「田代」編

田代という地名については、おもに4つの説があるようです。

1 「田城」説

◎田代城（今の愛川中学校の台地にあった）の城主・内藤下野守秀勝、三郎兵衛秀行の父子2代が、前方の水田を城の要害としたので「田城」（田をもって城を守る）となり、それが「田代」に変化した。（『新編相模風土記稿』）

2 「田の代わり」説

◎「田代」は「開けば水田になるべき地」（民俗学者：柳田國男、地名学者：金沢庄三郎）
◎天平16年（744）の大安寺資材帳に「開田」と「未開田代」の文字が見られる。「開田」は「開いた田」で「未開田代」は、「まだ開かないが田の代わりの地」であろう。この「未開田代」が簡略化され「田代」となったのだろう。田代の地は鎌倉時代頃まで「田の代わりの地」の名称だったが、やがて、開田後もその名称が続いてすべて「田代」と呼ばれるようになったのであろう。（元町文化財保護委員：大矢清市氏）

3 「田の場所」説

◎戦国時代の文書にすでに「田代 半原」という地名は出てきており、水田を要害に見立てたというのは、後世のこじつけである。「た」は水田を表し、「しろ」は場所を指している。「しろ」が場所を意味する例として、稲苗を育てるところを苗代（なわしろ）、囲炉裏を火代（ひしろ）、縫い目の部分を縫いしろ、紙細工でのりをつける部分をのりしろと言っている。入野の奥の開拓すれば水田になる土地に多くつけられた地名で、日本全国に数多くの例がある。（民俗学者・元町文化財保護委員：大塚博夫氏）

4 「アイヌ語、サンスクリット語由来」説

◎アイヌ語、さらにはそのルーツであるサンスクリット語（古代インド語）を元に考えると、「た(ta)」＝泉、細流、細支流であり、「しろ(siro)」＝滴る、泉、清水、川 であり、水流に関連した地名である。（地名研究家：山下重吉氏）

「海底」編

最初は読めませんでした。たぶん新しく愛川町の住民になった方は、なんと読んでいいのか頭をひねったことでしょう。「おそこう」と読むのが正しいようです。「おそこ」と読む人もいますが、古くからの土地の方は「おそこう」と呼んでいらっしゃるようです。さて、この「おそこう」ですが、いつから今のように「海底」の文字を使うようになったのでしょうか。

<表記の変遷>

戦国時代の文書には、「小曾郷」というのが出てきます。「おそこう」と読んだのでしょうか。「郷」は昔の行政上の区分の一つですが、では「小曾」はいったいなんでしょう？狭い土地を「おち」という例があるので、「おそ」もその一種でしょうか。疑問はあとからあとからわいてきます。ところで、江戸時代の『新編相模風土記稿』には、

毛利庄 角田村

小名 海底 乎曾古 日月社に収る永禄二年の棟札に海尻村と記せしは此所なるべし

と出ています。もうこの『新編相模風土記稿』ができた天保12年（1841）には「海底」と表記され、「おそこ」（または「おそこ」、「おそこう」と呼ばれていたのでしょうか。永禄2年は、1559年です。このときには海尻村とっていたようですが、なんと読むのかはわかりません。うみじり？うなじり？「おそこう」とは読みにくいようですが・・・。

今ひとつはっきりしたことはわかませんが、地名で大事なことは、音（おん）です。つまりどう発音するかが大事であって、漢字の表記は宛字が多いのであてになりません。実際、愛川町が海底（かいてい）にあったのは、今から600万年ほど前のことらしいです。

<おそ・おそこうの謎>

また「おそ」に戻りますが、山下重吉氏の『日本地名語源辞典』によると、なんと「たしろ」同様、アイヌ語およびそのルーツとなったサンスクリット語で解釈可能だそうです。同書から引

用します。

オソ oso 1. 細枝、細支流。has→haso→aso→oso

※用例〔遅沢、遅瀬、遅江、遅谷尾添川、押谷、遅越〕

田代と同様、ここでも「細い川の流れ」が出てきました。

また、「こう」または「ごう」についてはどうか、直接山下氏に教えていただいたのですが、「こ

ko」も「こう kou」も枝、支流、水流、川の意味があるとのこと。

「こ」の用例としては、〔小沢、小久保、小倉等〕、「こう」の用例としては〔甲賀、甲府、高

座、愛甲、本郷等〕があるとのこと。詳しくは同書をお読みください。

いずれにしても山下氏によれば、日本の地名は、川や水、泉等にルーツを持つのがほとんどだそうです。それは、人間の生存にとって、洋の東西を問わず水が不可欠だったことからくるものなのでしょう。そういう観点から自分たちの住む地域を見直してみるのも面白いですね。

「馬渡」編

大塚博夫氏によると、「ママ」というのは、川のそばの小急崖と解されている。また、川水が絶壁の下まで入りこんでいる場所も言う。馬渡はママの下を川越しすると考えれば、ママワタリとなり、馬が渡ったとという意味から外れて、人が通行に利用した場所となって不自然でなくなる とのこと。ママという地名に出合ったら、そこが崖のようにになっているかよく見てみましょう。たしかに馬渡橋のあたりは急な崖ですね。

＜参考文献＞

『新編相模風土記稿』（しんぺんさがみのくにふどきこう）

（江戸時代天保12年＝1841年完成の地誌）

『愛川町郷土誌』（愛川町教育委員会 昭和57年3月25日発行）

『日本地名語源辞典』（山下重吉 北村印刷 平成3年9月1日発行）

田代地区の歴史や地名について耳寄りな情報をお持ちの方は、ぜひ教えてください。またお詳しい方がいらっしゃいましたらご紹介いただけるとありがたいです。よろしく願います。ちなみに、この後は、海底和紙、田代にあったという発電所、戸倉の弁天様、田代城等についてレポートするつもりです。＜連絡先 田代小教頭 TEL281-0047＞